

隨筆一隅の記

筆一隅の記

野上弥生子

隨筆一隅の記 いちぐうき

昭和四十三年八月三十日 発行
昭和五十二年三月二十日 十一刷

八八〇円

著者 野上弥生子 のがみやえこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一―
編集部(〇三)二六六―五四―
振替東京四―八〇八

印刷・図書印刷株式会社 製本・新宿 加藤製本
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

一
隅
の
記

目

次

一隅の記	七
------	---

夏目先生の思い出	九
----------	---

夏目夫人とのこと	一一
----------	----

木曜会のこと	一三
--------	----

安倍さんのことさまざま	一三
-------------	----

一樹の陰	一四
------	----

記録の断片	一五
-------	----

武田さん	一五
------	----

諏訪渡り	一六
------	----

私の茶三昧……………	一六
春　　狂……………	一七〇
初　　夢……………	一七九
ベトナムの戦火に想う……………	一八三
私と『アンナ・カレーニナ』……………	一九五
巖本善治編『海舟座談』……………	一九九
はじめてオースティンを読んだ話……………	二〇三
『海神丸』後日物語……………	二〇五
あとがき……………	二〇七

一隅の記

昨年はお正月早々から、曾てないほど病院やお医者さまと多くの交渉をもつことになった。この起りは歯の治療をおもいたったためである。

八十歳を過ぎてまで運よく健康にめぐまれ、そのみは救いようのない不具な眼をのぞいては、からだの器官のいずれにも年齢的な故障はおきないですんだ。古い友だちで演説のような調子でしか話しかけられない人があると、私は不逞に考えたものである。もし視力ととり換えられるなら、いつそつんぼの方がましかも知れない。そんなだから、歯にしたって入れ歯ひとつなかった。

ところが一昨昨年の暮、上の奥歯の二本と、下の一本がぐらぐらしはじめ、痛みもないので放っておいたら、つぎつぎに抜けてしまった。洗顔の時ブラッシが触れたり、舌の先でちよつと圧したりのはずみの、秋の木の葉がほろりと散るみたいな、いかにも自然な脆い抜け方であった。

東九州の故郷の土地には妙なならわしがあった。上歯が抜けたら家の床の下に投げこめ、下の抜け歯は屋根の上にほうりあげろというのである。六つ七つで歯が抜けかわりはじめると、私たちは屹度^{きつと}そうさせられた。そのころの清白に牙えて、ほんの椎の実ほどもなかったのに較べれば、まるで異質物のようで、いろいろ黄ばみ、くさび型に獣の牙じみて尖った醜い抜け歯を掌にのせて、私はふと思ひ浮べたりした。或る夏の夕方、握っていた同じちいさいものを、頭上の高い屋根にむかつていっしょうけんめいで放りあげようとした幼い自らを。——もとより老いの抜け歯は紙にくるみ、机のひきだしに仕舞いこまれたに過ぎない。

むしろそんなことも忘れてしまった。それくらい三本の脱落は実感からも失せていたのに、数カ月もたったであらうか、なんとなく歯と歯のあいだが透いて来たと思ううち、次第に歯並びがわるくなった。とりわけ上の前歯の四枚は、いままでの位置と秩序を破って歯茎から引っこんだり、とびでたり、あいだにもう一本嵌めこまれそうなほどの隙間をつくつたりの始末だし、負けないうで勝手な並び方をしはじめた下の前歯には、二枚がかさなりあつて八重歯に近いものさえできた。これらの異形さはいやでも鏡に映るわけだが、奥歯の乱れも舌触りに紛れ^{まぎ}れがなかった。私はようやくおもしろい知らされた。あの三本は大事な柱^{ぐい}であつたことを。うち見にはまだ整然と割竹をならべていた庭の建仁寺垣が、気づかない間に間柱^{まばしら}が朽ちていたため、ちょっとした風雨にも急

にばらばらになったような崩壊が、歯のうえにおきたのである。私は無警戒を後悔した。三本の奥歯を失った時にいち早く手当をしていたら、こんなことにはならないですんだかも知れない。東京へ帰ったら一度お医者さまに診ていただこう。例年の長い山居のあいだで、遅まきながらここを決めた。

東京の生活に戻ってまもなく迎えたお正月のごたごたをすまずと、私はさっそく御茶の水の病院にA教授を訪ねた。紹介者は親しい間柄の同じお医者さんで、A教授とは大学も専門も別だが、アメリカの大学にしばらく一緒にいた関係から、私のためにかれこれ世話をやき、その日もつき添って来てくれた。

私室で待っていたA教授は、三本の抜け歯からのてんまつを聞いた後、廊下の向うのレントゲン室につれて行った。ひろいガラス窓の明るい部屋には、白衣に同じ白いかぶりものを小さい船のように頭上にのせた若い看護婦さんたちが、小十人もいたであろうか。なおそこには一脚の椅子と、前に目の高さほどにおかれた、ちょうど小鳥の巣箱めいた四角な箱とがセットになった恰好に並んでいた。その一組一組が白衣の娘さんたちの各自の担当らしかった。レントゲン室といえば、部屋そのものが暗箱のようなくらい場所と知っていた私には、めずらしい光景であったが、その椅子の一つに腰かけるや否や、ひとりの看護婦さんの手が私の口腔を押しあげ、白い紙ぎれ

のようなものを歯ぐきに押しあて、まえの巢箱めいた装置のシャッターを切る。それをいく度か繰り返すことで撮影は敏活にすんだ。

教授の部屋に戻って、できあがったフィルムを見せられた。紫っぽい翳りのあいだに、ほの白く並んでいるものしか私にはわからなかったが、教授は注意深くすかして眺め、これでは矯正はむずかしく、義歯にするほかならうとの診断であった。いい忘れたが、私は歯並びをなおす以上のことは考えていなかったし、A教授に頼らうとしたのも矯正が専門ときかされたためであった。

つぎの週に私はまた病院に出掛けた。とにかく、義歯の部門のB教授に相談してみてはとのA教授の勧めに従ったのである。

四階の長方形の部屋は両側とも天井までガラス窓の壁になり、同じガラスや、銀いろのびかびかした金属の治療の機械は、百台以上もあるかと思うほどのおびただしさで幾列にもなって並んでいた。それにお医者さんや看護婦さんたちは一斉に白いもののほかは身につけていないから、広大な空間いっぱい、なにか無機物的な妖しい白っぽさで漠々と見わたされた。もとよりあらこちらの手術の椅子では、患者が口をああとあけさせられたり、なにか奇妙な鉄のような機械を突っこまれたりしている。それがことごとく同じ操作で、どれがどれとも見分けがつかない。

もしA教授が御親切に案内の看護婦さんを伴わせてくれなかったら、部屋の向側のいちばん奥に自分の場所をもっていたB教授のもとへ辿りつくまでに、私は迷い子になったかも知れない。

きゃしゃなA教授にくらべれば大男の、がっしりした長身を純白の上っ張りにつつんだB教授は、話はすべて聞いていること、レントゲンの写真も見たことを語った。そぼの小卓の書類には、私のフィルムも交っているらしい。けっきょく義歯にするほかはないとの断定で、すぐさま型を取ろうということになった。私には説得の意味はわかって、どんなことをされるのかはわからないまま、前の椅子でぽかんとしていると、B教授は看護婦さんの一人になにかを命じ、もたらされた容器から、子供が粘土細工に使うような半固体の灰いろをしたものをしゃくいだすや否や、体軀に似たふとい指が、にもかかわらずはなはだ敏捷にその物質を私の口腔いっぱい詰めた。猿ぐつわを嵌められるというのはこんなものだろうか。それだって、もうすこしは触りが柔らかいかも知れない。いつそ口の中にコンクリートのビルディングでも出来たような感じであった。声にはなりえない驚きで、私は眼をしろ黒させていたに違いない。呼吸も鼻からだけで、息苦しかった。しかし二分とはたたないうちに、粘土はちゃんと造型されて口から取りだされた。それを掌にのせたB教授には、古生層の岩面に残るそのころの生物のちいさい化石の線や窪みを、細心に検査する地質学者めいた風情があった。私としてはやっと口の自由は取り戻したわけなが

ら、B教授の否応はいわせぬ調子の言葉にただうなずくほかはなかった。型をとったことで義歯はいよいよ決定的になった。B教授は最後にいった。そのまゝに抜歯の必要があります。そのほうのC教授に連絡をしておきますから、来週またおいでください。

つぎの週間、私は約束を守った。抜歯の部屋は階こそ違え、義歯のそれと同じく白っぽくきらきらした広い空間で、その時もA教授がつけてくれた看護婦さんのおかげでやっと辿りついた有様であった。ところがその手術台のそばで待っていたのは、B教授が頼んでくれたC教授ではなく助手らしい人であった。先生は文部省に急な用事で出掛けなければならなくなり、自分が代りを命じられていると彼はいい、健康状態についてあらたに二、三のことをきいたりした。

「では、あなたが歯を抜いてくださるのですか」

「そうです」

私は怖ず怖ずと彼を眺めた。年齢からすれば孫ともいえるだろう。まだほんの若いその相手は、上背はあるが瘠せて、どこか細く、白い上っ張りがうすい幅のない肩にぼさぼさしていた。私はなにか頼りない気持になった。

「抜くとして、何本でしょう」

「十二本抜くことになっています」

「十二本」

「そうです。ですがいっぺんに抜くわけじゃありません。疲れますからね。それで一週間に一度来てくれれば、二本ずつ抜くことにします」

私は返事の代りに暗算をはじめた。一週に二本ずつ抜くとして、十二本なら六週間かかるわけで、日数にすれば四十二日、ほとんど一カ月半になる。そのあいだ、数日おきに出掛けて来なければならぬわけだ。胸のそろばんはしだいに尻込みを弾きだした。もっとはっきりいうなら、病院通いそのものが厭わしいのもなければ、成城の家からクルマでも一時間あまりかかるのを大儀だと考えたのでもない。それよりかそれほどしばしば外出しなければならないのが、私の習性にはなんとも我慢されないものであり、今日までの三度の外出もようやっとのおもいであった。黒い太い眼鏡の柄が、やや張った頬骨のうえにくっきり斜線を引いている助手の顔を見つめて、私はあらためて質問した。

「抜かないでそのままにしておけば、どんなことになるのでしょうか」

「いつかみんな抜けてしまいます」

当然なことだ、といったその調子が私にとっさの決意をさせた。

「では、抜くのはやめましょう」

このいい方には自分では気づかない厳しさがあったのかも知れない。若い助手は、なあんだ、といった面持を隠さなかったので、私はいそいで言葉をついだ。「はじめから矯正ですますつもりで、A教授に診て頂いたのです。それでは駄目だとなったので、抜歯も仕方がないとは諦めましたが、十二本も抜くとは知りませんでした。私はもうこんな年齢で、歯並びのわるいぐらい、気にしまいと思えばされますし、食事にもさし支えはなく、べつに痛むわけでもないのですから。仰おほしやるように、打っちゃっておけば次第に抜け落ちるものなら、その時を待てばよろしいのです。明日仏さまになっても不自然ではないのに、その時義歯だけががんじょうに残っているとすれば、いっそ変かも知れませんか」

何故こんなことまで私は口にしたのだろう。孫ほど若い相手の気易さが、よけいな年寄りらしいおしゃべりをさせたのかも知れない、とあとではなはだ恥ずかしくなった。考えてみれば、十二本の抜歯を私にたじろがせたのも、彼が思いのほかの若輩であったことに基づくといえなくはない。もし文部省への急用なるものが生じないで、主任のC教授が約束通りそこにいたとすれば、私が若い助手に述べたようなせりふで抜歯を拒みえたかどうか、それはわからない。

とにかく、そんな事情で私の十二本の歯は危い運命から免れたのであるが、その当座は、やっぱり思いきって手術すべきであったとか、いや、義歯はいかに巧みにつくられようと天然のもの